

“My child is not only mine, but also a person.”

不登校などの子どもの母親たちの集りに顔を出しているメル友から、次のようなメール（抜粋）が入った。

【 色々な話がでますが、今回は、今までと違った感じになりました。

あるお母さんは、「自分が出来なかった事を子どもへ期待しているんだろうね。子どもは親の所有物じゃないのにね～」と色々と話しているうちに、小さい時に傷ついた事を突然涙ながらに、今まで誰にも話した事のない話を告白し始めました。

「自分の人生なんだけど、自分じゃないような、心から感動するとか無かったように感じます。

でも、子ども達の事から悩み苦しみました、そのお陰で実感のある生き方が出来るようになったように思います。」と。

また、「当たり前前に出来る事が出来る幸せ、本当に小さい事なんだけど、すっごく幸せに感じられる事が多くなった」と話していました。

あるお母さんは、昔に近い結婚生活を話し、あるお母さんは、小さい時から姉の影で我慢ばかりしていた事を話しました。

みんなでお互いにカウンセリングをしているようでした。

きっと、何かに気付くために、「こんな生き方をしているは駄目だよ」と言うメッセージを、子ども達が私達へ送ってくれているんだよね～。】

私造英語で云えば、“My child is not only mine, but also a person.”（子どもは、わが子というよりも、まずは個性ある一人の人間）。

母親も母親である前に一人の人間として、自分の弱さ、辛さを口に出す勇気も必要かと思うし、それを聴いてくれる人の存在も大事で、こうした集りは何よりも必要でしょうね。

人は「～は、～らしく」とあまり意識していると、ついつい相手を「～は、かくあるべし」と見がち。

自らの価値観（人生観）が変わり、人への接し方、話しかけ方が変わることが必要かなと思う。

ですから、多少のすれ違いが生じて「生きていく→人間関係→コミュニケーション（相互交渉）」し合う過程で、「実感のある生き方が出来るようになった」とあるように、人は互いに影響し合い、成長し合っていくのでしょね。

それが「生きている」ということかも……。